

## スウェーデン・サーミの生活と意識(1)

～サーミの教育実態～

札幌国際大学短期大学部 野崎剛毅

### 1. 目的

本報告は、スウェーデンの先住民族であるサーミの人々の教育実態を明らかにすることを目的とする。2007年の「先住民族の権利に関する国連宣言」以降、世界中で先住民族の権利向上が問題となっているが、なかでも文化継承やアイデンティティにかかわり、また当該地域における社会的地位の形成に大きな影響を与える教育の問題は重要である。先住民族と教育をめぐっては、教育アクセスの問題と、民族教育の保障にかかわる問題がある。そこで、サーミの人々の進学実態とサーミ学校の利用状況をみることで、これらの教育問題について考察をしたい。

### 2. 方法

分析には、2014年にスウェーデン在住のサーミの人々を対象におこなった郵送調査結果を使用する。スウェーデンのサーミ議会有権者名簿から抽出した1,225人に調査票を郵送し、332人から回答を得た。有効回収率は27.1%である。

### 3. 分析

まず、教育達成の実態をみてみると、対象者のうち大学まで進学した者は33.1%であった。60歳以上でその数字は24.8%と下がる一方、20～30代では50.9%と半数を超えている。高校卒業後すぐに大学へ進学する者が少なく、また生涯学習やリカレント教育が普及しているスウェーデンにおいて大学進学率を計算することは困難であるが、2003年に高校を卒業した者のうち43.6%が3年以内に大学へ進学したという。このことから考えると、サーミの人々は大学進学という点においてほとんど不利益を被ってはいないようである。なお、男女別の大学進学率をみると、男性25.0%に対し女性47.4%と、女性が圧倒的に高くなっている。

次に、民族教育の実態である。スウェーデンでは基礎学校初級・中級学年にサーミ学校が5校設置されている。また、1960年代まではノマド・スクールが設置され、トナカイ・サーミの子弟はそこへ通うことが義務付けられていた（ただし、そこではサーミ語を使用することが禁止されていた）。対象者のうち、サーミ学校かノマド・スクールへ通っていた者は49人（14.8%）であった。ここで特徴的なのは、サーミ学校等への進学に、地域差や世代差がほとんどあらわれないことである。サーミ地域に指定されている4市とサーミ地域ではないがサーミ学校がある2市を合わせた地域と、それ以外の地域とで、サーミ学校等への進学率に差はない。子どもをサーミ学校へ進学させた者にその理由を聞いてみると、サーミ語が身につくから（86.5%）やサーミの文化が学べるから（78.4%）といった回答をする者が多いことから、サーミ学校は言葉や文化に関心をもつサーミの家庭を全国から幅広く受け入れていることがわかる。

### 4. 結論

サーミはスウェーデン政府から民族的マイノリティに指定されている。世界中の多くのマイノリティが教育水準の低さに苦しむ中で、サーミはマジョリティとほぼ変わらない大学進学率を示していた。また、民族学校も、その数は少ないながら全国からサーミ語・サーミ文化の重要性を主張する家族の子どもたちを受け入れている。ただし、一方でサーミ語能力などをみると、サーミ学校出身者であるからといって決して高いわけではないという現実もある。これには、サーミ学校が基礎学校の初級・中級学年にしか設置されていないこと、サーミ学校以外の学校でサーミ語やサーミ文化を学ぶ機会があまりないことなどが関係していると考えられる。実際、対象者の56.6%はサーミ学校を拡充すべきだと考えており、これらがスウェーデンにおけるサーミ教育の大きな課題であるといえる。